自然災害科学 *J. JSNDS 22-1 1-2*（*2003*）

巻頭言

ノアの洪水の再来に備えよう

河川環境管理財団　研究顧問
芦　田　和　男

旧約聖書創世記のノアの洪水物語は良く知られている。「大いなる淵の源はことごとく破れ，天の窓が開き雨は四十日降り注いだ。水は地にみなぎり，山々をおおい，地上の生きとし生けるものは皆死んだ。しかし，ノアは神から大洪水があることを予告され，その命にしたがって作った箱舟で家族や選ばれた動物達とともに難を逃れた。」

これは単なる神話か，それとも人類がかつて経験した事実の伝承かに興味を持つ人々がいて，それを実証するための地道な努力が重ねられてきたこと，またその結果についてはあまり知られていない。

1872 年，ティグリス川の北にあるアッシリアの首都ニネヴェで楔形文字が彫られた粘土板文書が多量に発見された。その中にノアの洪水物語が見つかった。この事がノアの洪水を考えていく糸口となった。旧約聖書が書かれた年代よりもはるかに古い時代の話である。

ウルクの城主ギルガメッシュが不死の秘密を聞きだすため，大洪水のあと人類のうちただ一人生き残ったというウトナピシュティム老人をたずねた。老人はギルガメッシュに向かって「ギルガメッシュよ，お前に秘事を明かしてあげよう。・・・」と語りはじめた。その内容が十二枚の粘土板からなるギルガメッシュ叙事詩の中のノアの洪水物語であり，ウトナピシェティムこそノアと同一人物であることが明らかにされた。

その後，メソポタミア地方の遺跡の発掘が進むにつれ，驚くべきことに，ノアの洪水物語はバビロニアの遺跡からも，さらにずっと古いシュメールの遺跡からも発見されたのである。ここに至って，旧約聖書のノアの洪水物語は，ギルガメッシュ叙事詩と同じく，その起源はシュメールまでさかのぼることが明らかになった。

メソポタミア地方では，今から 5,000 年ぐらい前からシュメール人が都市文明を築いていた。治水・灌漑の技術や農機具の発明によって生産力を向上させ，また楔形文字を発明して神話や伝承などを記録し，その後の民族にも大きな影響を与えた。

今から 5,000 年前，シュメールの神官は洪水物語に加えて，洪水以前の治世の時代と洪水後の治世の時代とを区分した王朝表を編纂している。「王権が天より下ったとき，エリドゥに王権が定まった。八人の王が五つの都市を治めた。ついで洪水が襲った。洪水がひいた後，王権は再

び天より下った。」

メソポタミア地方の古い都市の発掘が進められ，いろいろな事実がわかってきた。1929 年，世界最古のシュメール都市・ウル（ユーフラテス川の河口近く）の発掘を行ったイギリスの考古学者レオナルド・ウーリーは次のように書いている。「都市の廃墟に特徴的なゴミ，日干しされていないレンガの破片，灰，土器の破片の混合物からなる下部の層を掘り進んだ。ウルの王墓も大体同じようなゴミの集積の中にあった。約 1 メートルの深さの所ですべてが突然消えた。きれいな河成層だけとなった。さらに 2.5 メートルばかり掘った所でフリントの破片と彩色した土器の破片が突然あらわれた。この厚さ 2.5 メートルの河成層は局所的なものでなく，かなり平面的な拡がりを持っているものであることが確かめられた。」シュメールの神官の記述が実証されたのである。

メソポタミア地方では今から 5,000〜6,000 年前にすでに都市国家が作られ，ウバイト文化と呼ばれている文化が花開いていた。そこに，大洪水があり全て失われた。洪水後そこに入ってきたのがシュメール人であり，その神官が先住民族の洪水の記憶を粘土板に記録したのである。この地方では，その後民族の興亡を繰り返して来たが，大洪水の記憶は民族から民族へと語り伝えられノアの洪水物語として今に伝えられているのである。

私は，連綿と続いていく人類の文化に感動を覚え，その源流となった楔形文字の彫られた粘土板を見るために大英博物館を訪ねた。書かれている内容はわからないが，感慨深いものがあった。

さて，ノアの洪水の原因について考えてみる必要がある。ノアの洪水物語とよく似た物語はインド，ビルマ，中国，オーストラリア，オセアニア，北米，中南米，北欧，古代ギリシア，古代エジプトなど世界各地にある。一地方の経験が世界各地に伝播していったと考えるよりは，同様な現象を世界各地で経験した，すなわち大規模な洪水が地球規模で起こっていたと考えた方が自然である。

ノアの洪水があったと見られる今から 5,000〜6,000 年前には，日本においても関東平野の縄文海進のピークの時代であった。なおその頃，房総半島付近には造礁サンゴが盛んに生育しており，関東南岸の表面水温は現在よりも 3 ℃あまり温かかったと推定されている温暖な時期であった。

人類は 6,000 年前頃には，すでに沖積平野に進出し，定住して農耕文化を築いていくようになっていた。そこに世界的な規模での海進とそれに繋がる大河周辺での大規模な洪水氾濫が襲った。そこに住む人間の生活や文化を根底から奪うような大災害が発生した。それが，ノアの洪水によると見られる河成堆積層の存在であり，また，世界各地に伝えられる洪水物語であろう。

現在，人間活動による地球温暖化によって，まさに同じようなことがおころうとしている。ノアの洪水の再来である。現在，人類は主として海岸や川沿いの平野に都市を築いているが，ノアの洪水の再来によって致命的なダメージを受けることは間違いない。島嶼国では国ごと水没するかもしれない。今年 3 月に開催された世界水フォーラムでも，この問題が取り上げられ，島嶼国の人々が特に真剣に議論していたことが印象的であった。

しかも今回の温暖化の速度は，自然のそれに比べて早く，生態系全体に非常に大きな影響を与えるものと思われる。

ノアの洪水の再来は物質の豊かさを追求してきた現代文明を自然共生の文明に転換しなければ避けることは出来ない。これについては多くの人々が心配しており，国際的な努力も続けられている。しかし，一方では現代文明をあくまでも追究しようとする人々もおり，十分な成果を上げることは難しく，結局ノアの洪水は再来するであろう。そのような状況では，ノアの洪水物語が教えているように，洪水が，いつ，どのような規模で起こるかを予知して予め対処の方法を考えておき，難を逃れることが重要である。人類文明の将来を見据えて，長期的な視点を持って取り組む必要がある。

それには，研ぎ澄まされた感性によって今後起こるであろう様々な現象を洞察し，さらに論理的な思考によって，難を逃れる方法を用意しなければならない。

豊かな感性と知性を持った自然災害科学者からの貢献が切に望まれる。